

新山山田遺跡 陰田広畑遺跡

- 調査概報 -



1995.3

財団法人 米子市教育文化事業団

新山山田遺跡



青磁



備前のすり鉢

<10>0100571629

陰田広畠遺跡



第7テラス全景



掘立柱建物跡

陰田広畠遺跡



鍛冶炉



鉄関係遺物

陰田広畠遺跡



墨書き土器



朱塗り土器

例　　言

- 1 本書は鳥取県が実施する一般国道180号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概報で、調査概報は1991年に『新山・山田古墳群・山田遺跡・研石山遺跡』、1992年に『陰田・夜坂谷遺跡・隠れが谷遺跡』、1993年に『新山遺跡群・奥陰田遺跡群』、1994年に『奥陰田遺跡群』を刊行しており、今回は第5冊目となる。
- 2 調査は鳥取県からの委託を受けて財米子市教育文化事業団が行った。
- 3 奥陰田広畑遺跡の調査は、平成6年4月1日から 平成7年3月31日まで行った。調査面積は8,500m²（一部継続中）である。
新山山田遺跡の調査は、平成6年12月12日から平成7年1月13日まで行った。調査面積は500m²である。
- 4 道構等の名称や内容は調査時に慣用したものに基づく。調査・整理は継続中であり、今後本報告書作成の過程で部分的に見直す可能性もある。
- 5 本文の執筆は米子市教育文化事業団調査員高橋浩樹、小泉千絵（県派遣）、深田洋史（同）が行い、編集は全員の協議によって行った。

目　　次

位置と環境	6
歴史的環境	8
調査概要	11
新山山田遺跡	13
陰田広畑遺跡	19

捜図目次

図1	位置と周辺の遺跡
図2	新山・奥陰田遺跡分布図
図3	掘立柱建物実測図
図4	山田遺跡道構全体図
図5	井戸実測図
図6	井戸出土遺物実測図
図7	落とし穴実測図
図8	山田遺跡出土遺物実測図
図9	広畑遺跡テラス配置図
図10	広畑遺跡6テラス遺構全体図
図11	広畑遺跡7テラス遺構全体図
図12	掘立柱建物実測図
図13	豊穴住居実測図
図14	鉄滓分布図
図15	広畑遺跡出土遺物実測図①
図16	広畑遺跡出土遺物実測図②

図版目次

図版1	新山山田遺跡調査地全景
図版2	掘立柱建物
図版3	井戸
図版4	井戸
図版5	落とし穴
図版6	陰田広畑遺跡調査地全景
図版7	掘立柱建物
図版8	豊穴住居
図版9	陰田広畑遺跡遺物出土状況①
図版10	陰田広畑遺跡遺物出土状況②

位置と環境

米子市は鳥取県の最西端に位置し、面積100.05km²、人口134,459人の工業・商業都市である。北西は境港市、北は日吉津村、東は淀江町、南東は大山町、南は岸本町、会見町、西伯町、南西は島根県伯太町、西は島根県安来市と接している。

地形は、米子平野を中心にして、日本海に面する北部には砂浜海岸、北西部には弓浜半島、東側から南側、西側の周縁部には大山（1,729m）中国山地より続くなだらかな山地や丘陵から構成される。市北西部に面している中海は、面積98.1km²の潟湖で、大橋川を通じて宍道湖と繋がっている。

旧伯耆・出雲の国境である鳥取・島根県境は、山地の尾根線に上の自然境界であるが、上記のような地形と大橋川を通じて宍道湖と繋がっている中海に面していることから、太古より周辺地域の交流は、行政の枠を越えて盛んであった。古くは、米子市南西部に位置する新山砥石山遺跡より、安来市の門生古窯群で大量に作られた5～6世紀の須恵器が出土したこと、現在でも言語学上同類とされる雲伯方言の存在、中海新産業都市が同地域を中心に指定されたこと等より、行政の枠を越えた同一の生活圏、文化圏、経済圏の存在が伺える。

調査地は、米子市陰田町、及び新山に所在する。

陰田町は米子市西端、島根県安来市に隣接する県境の町である。北方は中海に面してのいて、残り三方はなだらかな山地に囲まれている。集落は山麓の低地にあり、中海寄りの口陰田地区、谷奥部の奥陰田地区に分かれる。奥陰田の谷奥を進み、峠を越えると新山である。以前このルートは新山方面からの清水寺参詣の道であり、米子市街地へ抜けるルートであった。

伯耆誌には、貞応宝治年間（1222～1248）の記文に「会見郡のうち奥陰田、口陰田、西大谷、目角、大谷の五ヶ村を犬田庄と云う」と記載されている。日御崎神社文書によると、天文2年（1533）の尼子経久の寄進状に、「雲州日御崎神社に伯州相見郡福田保犬田村から米五十俵、十合併で三斗六升を寄進」という記述されている。また、同文書に、同年2月経久の孫詮久が犬田村を社領として安堵する寄進状が出されたと記載してある。支配した大名が、尼子氏から毛利氏に変わっても、犬田村は同神社社領であることを安堵されていた。

江戸時代以降、制札場に指定され、口陰田には境番所が置かれた。また、享保7年（1722）までに宿駅に指定された。犬田の地名が駿田に変わったのも江戸時代である。正保国絵図では犬田村と記されているが、元禄郷帳には陰田村と記されている。また江戸時代以降、米子城主の所領となつた。

現在、陰田町として一つの行政区としているが、奥陰田、口陰田と別々の自治会、公民館を持ち、また産土神として奥陰田に犬田神社（山王大明神）、口陰田に日御崎神社が祀られる等、両地区ともひとつの集落として完結したまとまりがみられる。

両地区とも、米子市・松江市を含む山陰最大の消費地、中海圏を後背地に抱えていることから換金性の高い作物を中心とした農業を行っている特徴がある。口陰田の中海沿岸部では、江戸時代まで漁業で生活している家もあったが、明治時代以後干拓により水田が造成され、また

中頃に梨栽培が始まり、現在では梨、柿、葡萄等の果樹栽培と筍栽培が盛んとなった。一方奥陰田では、第二次大戦後、副業であった花卉栽培を、需要の高まりから規模を拡大し、種類を増やす農家が増えた。

現在、産業の中心は、奥陰田では農業であるが、口陰田では多岐にわたる。自動車交通発達による国道9号線の整備や、中心部の水田が昭和43年の米子操車場設置時と、昭和50年からの米子バイパス工事により丘陵部の梨畠等が売却され、米子市内からバイパス、米子西高校に連絡する県道も整備されたことにより、主要道路沿いに飲食業やマンション管理業、倉庫業等への進出する動きがみられた。この結果、1970年の農家率が77.1%なのに対し、1990年の農家率が23.3%になる等の産業の多角化が進んだ。

一方奥陰田は同じ県境の町であるが、口陰田に比べると、山地の多い地形のため開発の波が届かず、1970年の農家率96.7%に対し、1990年の農家率89.7%と産業構造に変化がみられず、前述した経済的好条件下のもと、安定した農業を営んできた。180号バイパス工事は、同地区内で進められているが、地区内中央を通るのではなく山地丘陵部を通過するため、開通後の変容は口陰田と比べると少ないと考えられる。

新山は米子市南西部、南は西伯郡西伯町、西は鳥根県能義郡伯太町に接する県境の町である。

米子市街地を流れる加茂川は、新山に源を発する。集落の大部分を山地が占めるが、加茂川に沿う谷筋に、東に向かって平地が開けている。集落は山麓沿いにあり、萱原、豆腐屋、等の小字が加茂川と並行して並んでいる。

加茂川にはほぼ並行して県道米子広瀬線が通る。伯太町の安田を通り安来市へと抜けるルートであり、このルートは古代山陰道と考えられており、清水寺参詣の道であったこと等から、古来より利用されてきた交通路であるといえよう。また、萱原から砥石池の北岸を通り奥陰田へ至るルートは、現国道180号線が整備されるまで米子市街地への交通路として利用されていた。前述のような地勢のため、古来より県境を越えての交流が行われていた。特に伯太町の安田、母里と新山、橋本、青木等米子市南部の集落では婚姻関係等、交流が盛んに行われ、地域間の強い結びつきがみられる。

白山権現を祀り、新山地区の産土神である比婆山白山神社は要害山の東麓にある。要害山は標高281mで、ここに新山城が永禄6～9年（1563～1566）の間に築城されたといわれている。酒屋側、豆腐屋等の小字名は、新山城下町の名残りであると考えられる。また小字能園寺には以前能園寺があり、米子城下の愛宕山麓に移転した時に現在の桂住寺に改称したと伝えられている。新山地区に桂住寺の檀家が多いのは前述のことが要因であるという。

産業の中心は農業である。加茂川沿いの谷は、水田に利用されている。販売作物は、米が中心になっているが、中には葉たばこを中心に販売している農家もある。稲作中心の農家が多いため、余剰農業労働力が農作業省力化により生じ、また県道が中心部を通っているため就業機会が確保されていることから第2種兼業農家の割合が高くなっている。

県境に隣接し谷奥のために開発が進まなかった新山も180号バイパスが中心を通過することになり、今後口陰田同様に産業構造、集落の景観は変容していくだろう。

歴史的環境

新山山田遺跡は米子市新山、陰田広畠遺跡は米子市陰田に所在し、市街地より南東2～4kmの位置にあり、これらの周辺には縄文時代から中、近世に至るまでの数多くの遺跡が分布しており、ここではこれらの遺跡について時代を追って概観してみたい。

縄文時代

早創期は大山山麓で有舌尖頭器などが採集されており、奈喜良遺跡（15）からも有舌尖頭器が出土している。

早期は尖底押型文土器が出土する遺跡が大山山麓の台地上に点在し、上福万遺跡では押型文土器、撫糸文土器が出土し、土坑や配石墓と考えられる集石遺構が確認されている。

前期になると遺跡は台地上から低湿地へ進出し、目久美遺跡（3）では貝殻条痕文土器、爪形文土器が出土し、貯蔵穴も確認されている。陰田第9遺跡（7）では九州の轟式土器の影響を受けたと思われる押し引き沈線文土器が出土している。陰田第1遺跡（8）では貯蔵穴が確認されている。これらの海岸沿いの遺跡からは偏平な河原石の両端を欠いた石錘が多量に出土しており、漁業が行われていたことが想起される。

中期は現在のところあまり明確ではないが、前期から継続する目久美遺跡では土坑が確認されている。

後期には遺跡が低湿地に継続して営まれるのに加えて丘陵上にも営まれるようになる。青木遺跡（19）では250基以上の落し穴が確認されている。東宗像遺跡（11）でも落し穴が確認されている。

晩期には遺跡の数が減少する傾向にあり、大袋丸山遺跡（21）では突帯文土器が出土している。青木遺跡ではピット群と落し穴が確認されている。奈喜良遺跡では突帯文土器、石斧、石鎌が出土している。

弥生時代

弥生時代には大陸から稲作が伝わり、縄文時代までの狩猟、採集社会から水田経営による農耕社会へと変化する。

前期には目久美遺跡で低湿地水田と微高地に形成された集落が確認されている。口陰田遺跡（5）、長砂遺跡（9）も同様な低湿地の遺跡である。

中期には遺跡の数が急増し、遺跡の立地は低湿地から沖積台地、河岸段丘へと移行し、青木遺跡、奈喜良遺跡などが営まれる。青木遺跡では奈良時代まで継続する集落が形成されはじめ、土壙墓も1基確認されている。また、低湿地の遺跡も継続して営まれ、目久美遺跡、池ノ内遺跡（4）では水田が確認されている。

後期には中期から継続するものと後期に出現するものがあり、両者とも古墳時代まで継続する。前者には青木遺跡があり、後者には福市遺跡（14）、池ノ内遺跡、奈喜良遺跡、陰田第1

遺跡、陰田第6遺跡天坂・久幸地区（6）、尾高浅山遺跡がある。尾高浅山遺跡では3重の環濠がめぐる集落と集落に近接する四隅突出形墳丘墓が確認されている。

古墳時代

前期の古墳には1辺20mの方墳の日原6号墳（17）があり、古墳時代前期墳丘多葬例として注目される。青木遺跡では方形周溝墓、円形周溝墓が確認されている。集落では弥生時代から継続して営まれるものが多く、福市遺跡、青木遺跡、奈喜良遺跡、陰田遺跡天坂・久幸地区がある。

中期は古墳では全長32mの前方後円墳で地山の岩盤をくりぬいた特異な埋葬施設をもつ宗形41号墳（12）と若年女性を埋葬した箱式石棺を主体部とした陰田41号墳（6）、做製斜縁八神鏡が出土した水道山古墳（10）がある。また、青木遺跡では前方後円墳、方墳、円墳の多様な小古墳群を形成している。集落では福市遺跡、青木遺跡、奈喜良遺跡がある。

後期は古墳では別所1号墳（22）は横穴式石室を主体部とする前方後円墳で、繕付円筒埴輪に顔をつけたような人物埴輪が出土している。また、この時期には小規模な群集墳がつくられ、木棺と横穴式石室を主体とする陰田古墳群（6）、横穴式石室を主体とする宗像古墳群（12）、横穴式石室と箱式石棺を主体とする東宗像古墳群（11）などがある。また、出雲地方の影響を受けて横穴墓の築造が始まり、50基の横穴墓が確認された陰田横穴墓群（6）をはじめ、総泉寺横穴墓群（2）、東宗像横穴墓群（11）などがある。集落は福市遺跡、青木遺跡から諒訪遺跡群へと広がり、長者原台地一帯に分布している。

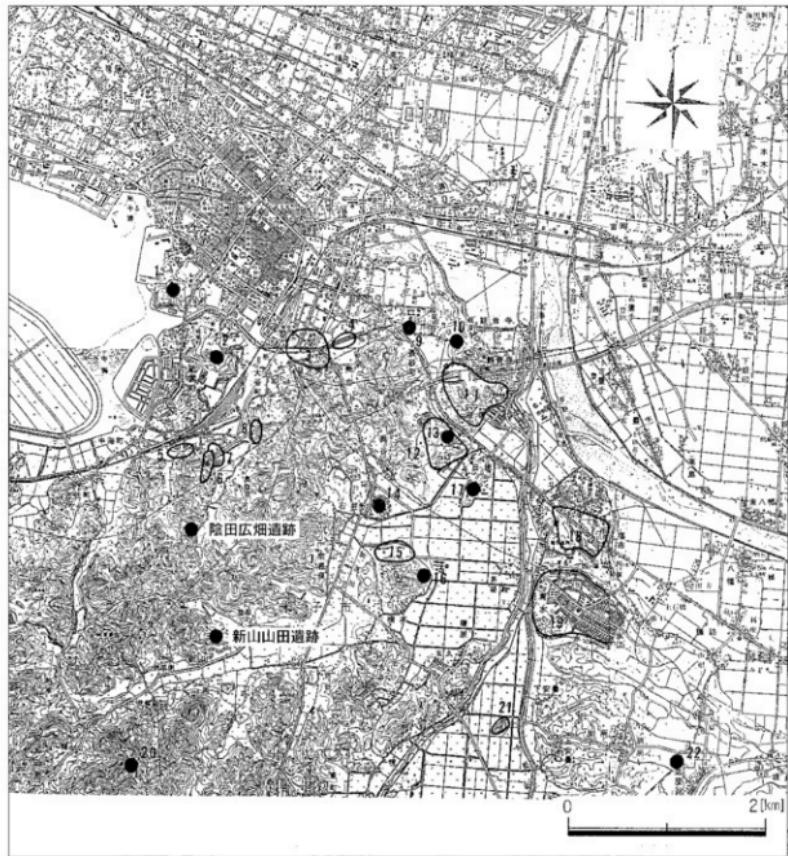
歴史時代

奈良時代には福市遺跡、青木遺跡で掘立柱建物で構成される集落が確認されている。

平安時代には式内社宗形神社（13）が延喜式に記載されている。

中世には戦国期の動乱を背景として石井要害（14）、橋本宝石城（16）、新山城（20）、尾高城などが築かれる。

近世には米子城（1）が築城され、城下町が形成される。



第1図 周辺遺跡分布図

1	米子城	2	総泉寺横穴墓群	3	目久美遺跡
4	池ノ内遺跡	5	口陰田遺跡	6	陰田遺跡群
7	陰田第9遺跡	8	陰田第1遺跡	9	長砂遺跡
10	水道山古墳	11	東宗像古墳群	12	宗像古墳群
13	宗形神社	14	石井要害	15	奈喜良遺跡
16	橋本宝石城	17	日原6号墳	18	福市遺跡
19	青木遺跡	20	新山城	21	大袋丸山遺跡
22	別所1号墳				

調査の概要

調査の原因

本調査は、鳥取県が実施する一般国道180号（米子バイパス）道路改良工事に伴うものである。米子バイパスは、国道180号の交通渋滞の緩和と、県西部地域間の活発な交流促進を期して計画され、米子市陰田町の国道9号バイパスを起点として、陰田町奥陰田、新山、古市を経て西伯町に至るものである。当面、陰田町から県道米子・広瀬線と交差する新山までを第1期工事として事業実施されることになった。延長は約2km、平成9年度開通の予定である。

米子バイパスのルートにあたる奥陰田、新山地内では、一般国道9号米子バイパス工事に伴う埋蔵文化財発掘調査等により周辺の山麓や台地で弥生時代から奈良・平安時代にかけての集落跡や古墳、横穴墓等が確認されたことから、遺跡の存在が予想された。そのため、鳥取県道路課、米子土木事務所、鳥取県教育委員会文化課、米子市教育委員会で取扱いを協議し、前述の4者による現地調査（昭和60年度）と米子市教育委員会による試掘調査（昭和63年度）を経て、米子市教育委員会が、鳥取県教育委員会文化課の協力・支援を得て実施することになった。

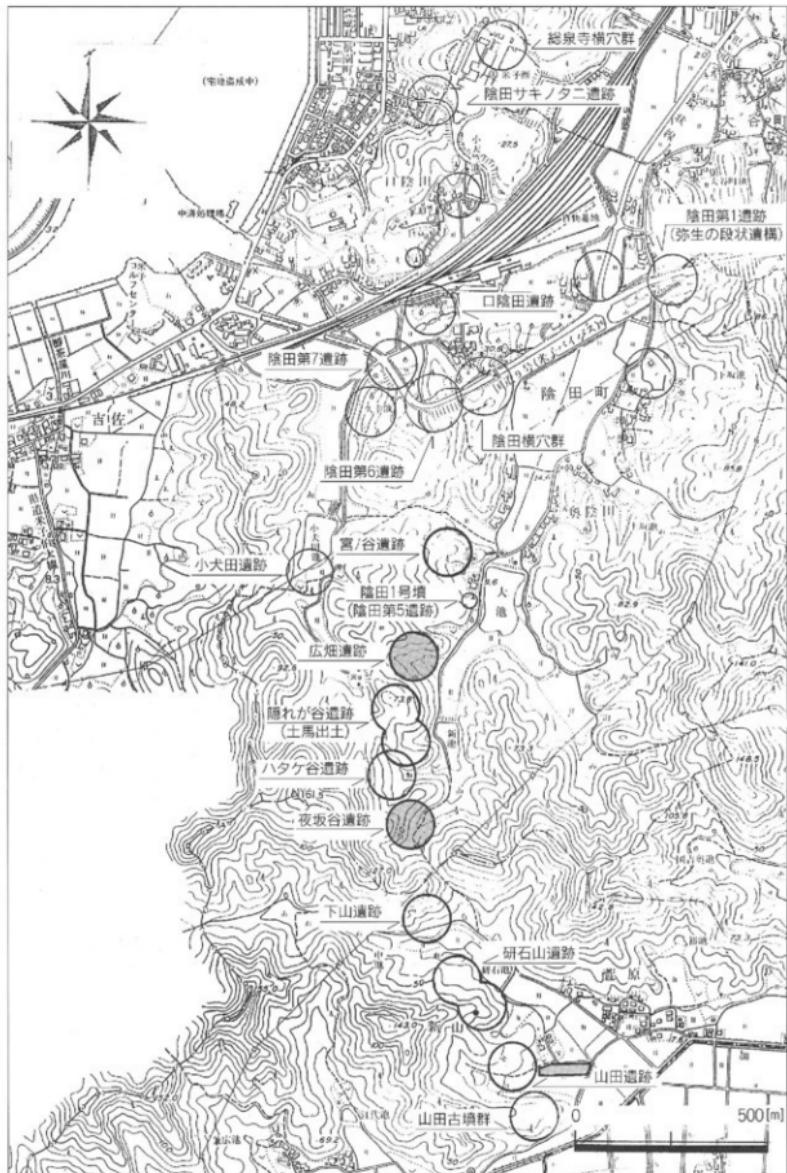
発掘調査は、平成元年度より、年度毎に継続して今日に至っている。新山地内では平成元～3年度に研石山、山田、下山遺跡、奥陰田地内では平成2～5年度に夜坂谷、ハタケ谷、隠れが谷、広畑、官の谷遺跡の調査が実施されている。この間、米子市での文化財体制の見直しに伴い、平成4年度から、調査主体が米子市教育委員会から財団法人米子市教育文化事業団（理事長森田隆朝）に移行した。調査報告書は、新山と奥陰田を分冊で作成し、平成5年度に新山分を刊行した。奥陰田分については、平成8年度に刊行する予定である。

調査の経過

平成6年度は、夜坂谷遺跡、広畑遺跡、そして新山地内での交差農道拡張工事に伴う山田遺跡の調査を行った。

夜坂谷遺跡の調査は4月より開始し、計6本のトレンチを設定したが、第1トレンチで、飛鳥～奈良期のテラス状遺構と遺物が検出された以外、遺構、遺物の検出は無く6月7日で調査を終了した。広畑遺跡の調査は6月1日より開始した。広畑遺跡は、前々年度、前年度に一部調査されている。（谷の北側斜面と尾根の頂部は、調査範囲の関係から道路部分と東側の平盛等の部分をA区、西側の平盛部分をB区として調査を実施した）B区の一部は、来年度に継続となった。山田遺跡は、12月12日より調査を開始し、1月11日に調査地完掘状況を撮影し、1月13日に調査を終了した。平成6年度の調査面積は総計13,500m²である。

社会教育的な側面から、7月に陰山いせき祭りを、1月に山田遺跡の現地説明会を開催し、遺跡についての理解及び、地域との交流を計った。また、年間を通じて小中学校の生徒等多数の見学者があった。



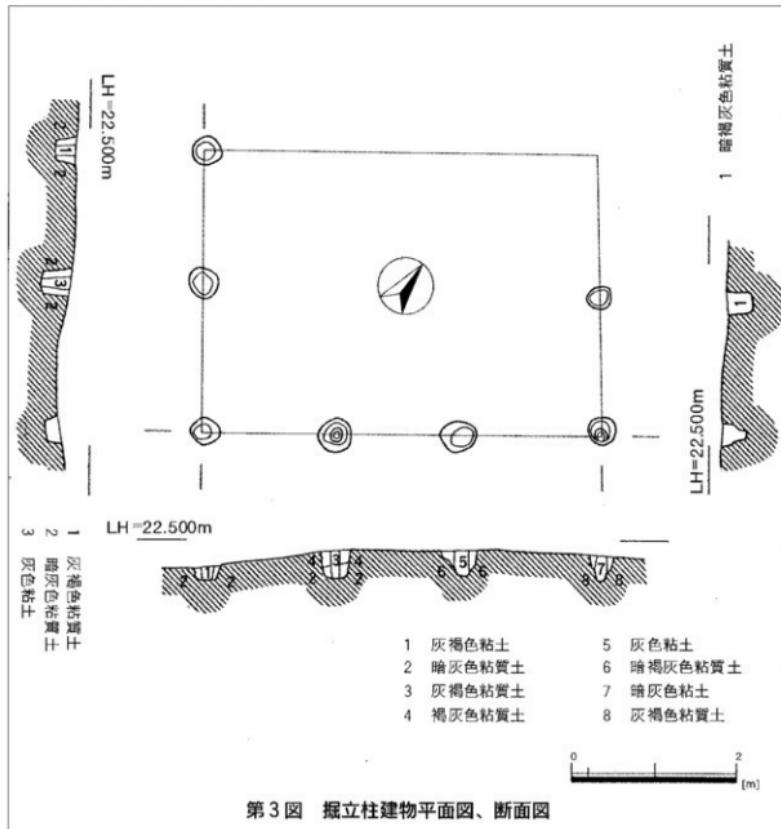
第2図 調査地と周辺遺跡

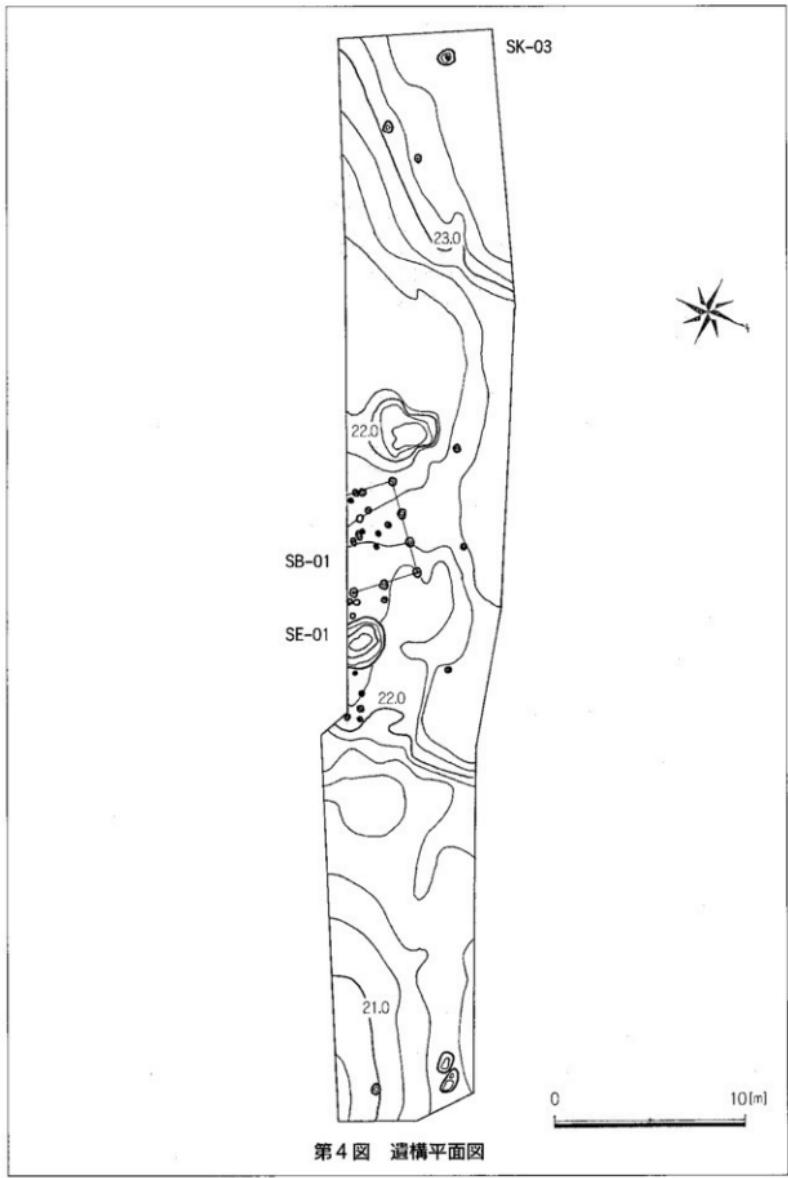
遺構

調査地は北東にのびる尾根の裾部に位置し、現状は水田であるが今回の調査でこの北東にのびる尾根からさらに東へのびる尾根を確認し、これらの尾根上で掘立柱建物1棟、井戸1基、落し穴1基、土坑4基、溝9条、ピット26基を検出した。

掘立柱建物 (SB-01)

SB-01は桁行3間、梁行2間で、主軸はN-53°-Eである。柱間は1.7~1.9mではほぼ等間である。柱穴内からは遺物が出土していないために時期は不明であるが、後述する井戸とほぼ同時期である可能性がある。

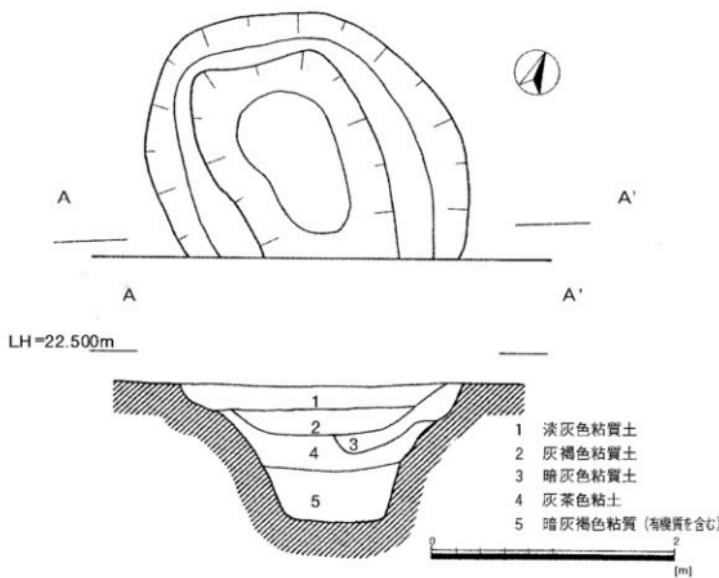




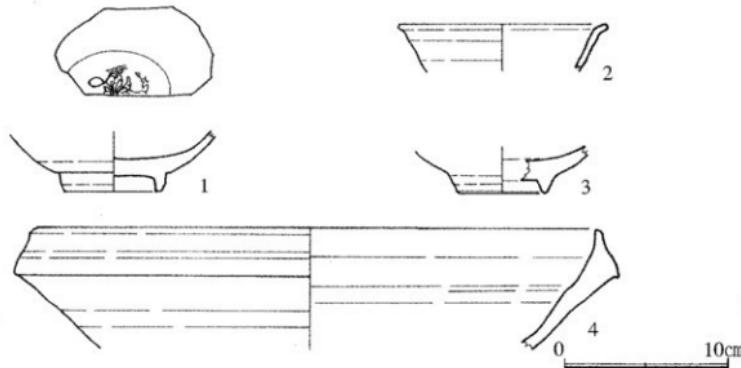
第4図 遺構平面図

井 戸 (SE-01)

SE-01は二段掘りの井戸で、長径2.0m以上、短径2.7m、深さ0.5mの平面橢円形の堀方の中に長辺1.7m以上、短辺1.4mの平面隅丸長方形の堀方がある。井戸の深さは1.3mで、井戸枠は確認できなかった。遺物は須恵器、土師器、青磁碗、備前焼すり鉢が出土した。



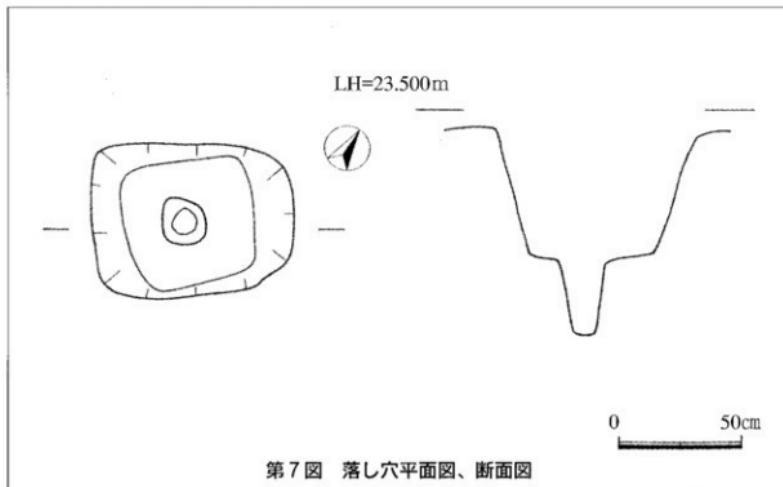
第5図 井戸平面図、断面図



第6図 井戸出土遺物実測図

落とし穴 (SK-03)

SK-03は平面隅丸長方形で、長辺0.8m、短辺0.6m、深さ0.5mをはかり、底辺には直径0.2m、深さ0.3mのピットがある。この底面ピットの存在から落とし穴と考えられる。遺物が出土していないために時期は不明である。



第7図 落し穴平面図、断面図

出土遺物

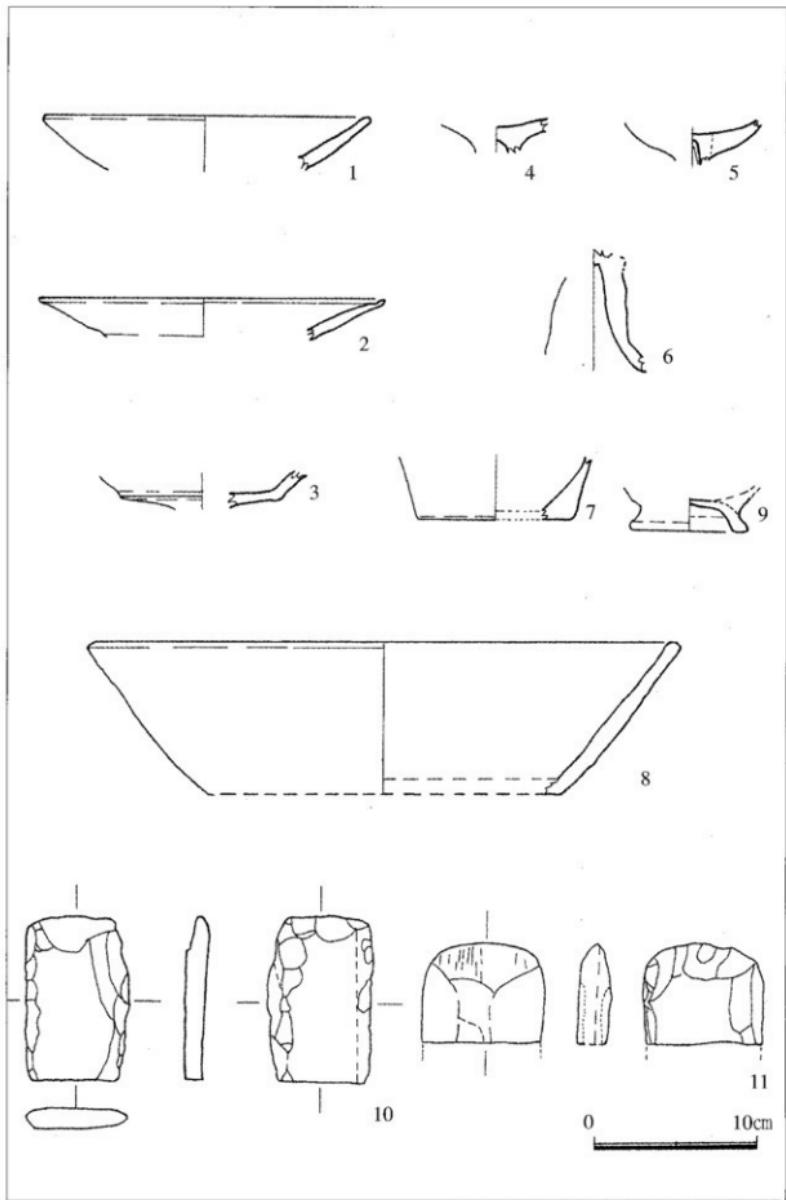
遺物は取り上げ点数にして112点出土した。その内訳は現水田耕作土層44点、圃場整備時の造成土内17点、谷部堆積土層4点、地山直上40点、SE-01内7点である。ここではSE-01、地山直上出土の遺物を図示し、報告する。

SE-01出土遺物（第6図）

SE-01からは弥生土器、須恵器、青磁、備前が出土したが、ここでは青磁と備前にについて図示し、報告する。

青磁（1～3）1は高台が断面四角形で、疊付部は平坦である。高台端部及び高台内は無釉である。見込みには印花文がある。2はほぼまっすぐ外傾する端反の椀である。3は高台が断面三角形で、端部は削っている。高台端部及び高台内は無釉である。これらはいずれも龍泉窯産である。13～14世紀のものである。

備前（4）はほぼまっすぐ外傾し、端部付近で内傾し、外下方につまみ出し、段を有する。端部は内湾して鋭くおさまる。間壁編年V期のものである。



第8図 新山山田遺跡出土遺物実測図

地山直上出土遺物（第7図）

地山直上からは弥生土器、土師器、須恵器、石器が出土し、弥生～中世の遺物が見られるが、弥生土器が多く出土している。

弥生土器（1～8）高坏（1～6）1は口縁はやや内湾し、端部は肥厚し丸くおさまる。2は底部から屈曲して口縁が立上り鈍い稜を有する。口縁はやや内湾し端部付近でわずかに外反し、端部は段を有し、鋸く丸くおさまる。3は底部から屈曲し、口縁はやや外反気味に立上る。屈曲部には鈍い稜を有する。4は脚部から外反して底部となっている。5は内湾気味にのびる底部で、坏と脚の接合は坏底部の穴に脚をさしこみ正置した状態で時計回りに脚をしづらりこんでいる。6は柱状部はやや内傾し裾部から屈曲して「ハ」字に開く。底部（7）は外傾してまっすぐ体部が立上る。鉢（8）は口縁は外傾してまっすぐのび、端部は厚く平坦である。

土 師 器（9）9は高台付きの坏身で、高台は大きく「ハ」字に開き、端部付近でさらに大きく外反して端部は厚く丸くおさまる。

石 器（10、11）10は直刃の石斧の未製品で、刃部及び周辺部を調整剥離をした状態であるが、周辺部の一部を研磨している。11は円刃の石斧で、刃部は研磨してあるが、周辺部は調整剥離のままである。また、刃部には擦痕がみられる。

まとめ

今回の調査では中世後半の集落の一部を確認した。この集落は東へのびる尾根上で掘立柱建物1棟と井戸1基を検出したもので、これらは同時期に同じ屋敷地内に存在したものと思われ、間垣によって区画された屋敷地内にこれらに他に数棟の建物が存在したものと思われるが今回の調査では確認できなかった。また、集落の範囲についても明らかにできなかったが、この尾根上、さらにこの尾根が派生する北東へのびる尾根上に広がるものと思われる。今回確認した集落の性格については中世に成立した榎原荘との関連が考えられる。榎原荘は実久、青木、大谷、今、古市、新山、奈喜良、橋本に広がる莊園で、出雲から伯太町安田閑、新山を経て青木にぬける街道沿いに位置している。当遺跡とほぼ同時期の山田古墳群では鎌倉時代末～室町時代の伏鉢が2基確認され、山田遺跡1区の北西側の丘陵裾部では当該期の遺物が出土し、土坑も確認されている。これはこの時期に山田古墳群と山田遺跡との間の谷で水田開発が行われはじめ、集落が形成されたことを示唆するものであり、榎原荘の開発がこの時期から行われたものと考えられる。当集落の存続時期は13～16世紀前半で榎原荘の成立と時期を同じくすることから榎原荘との関連が強い。また、16世紀前半には集落は廃絶しており、16世紀中頃に築城される新山城と集落の廃絶には何らかの関係があるものと考えられる。つまり、当集落は榎原荘の成立とともに形成され、同じ街道沿いに位置する伯太町安田宮内を中心に成立した石清水八幡宮領安田荘と街道を介しての何らかの交流があったものと考えられ、16世紀中頃の新山城築城に伴い何らかの要因で廃絶したものと思われる。

奥陰田遺跡群

遺跡は、奥陰田集落の南側の幅約50m、奥行き約700mの狭隘な谷筋に面した丘陵上に立地する。谷口から順次谷奥に向かって宮の谷遺跡、岩屋谷遺跡、広畠遺跡、隠れが谷遺跡、ハタケ谷遺跡、夜坂谷遺跡と続き、ほぼ全域に分布する。谷或いは尾根ごとにまとまりを見せる一方で、相互に関連する一連の遺跡群として把握されるものである。

遺跡の形成は、縄文時代、弥生時代後期～古墳時代前期、古墳後期時代～平安時代の各期にわたり、特に飛鳥～平安期に大きな展開を見せる。それぞれ狩猟場、古代集落跡、鍛冶及び祭祀関係遺跡と考えられる。

縄文期は谷奥が舞台であり、夜坂谷遺跡、隠れが谷遺跡に落し穴状土坑、石鍛が見られる。

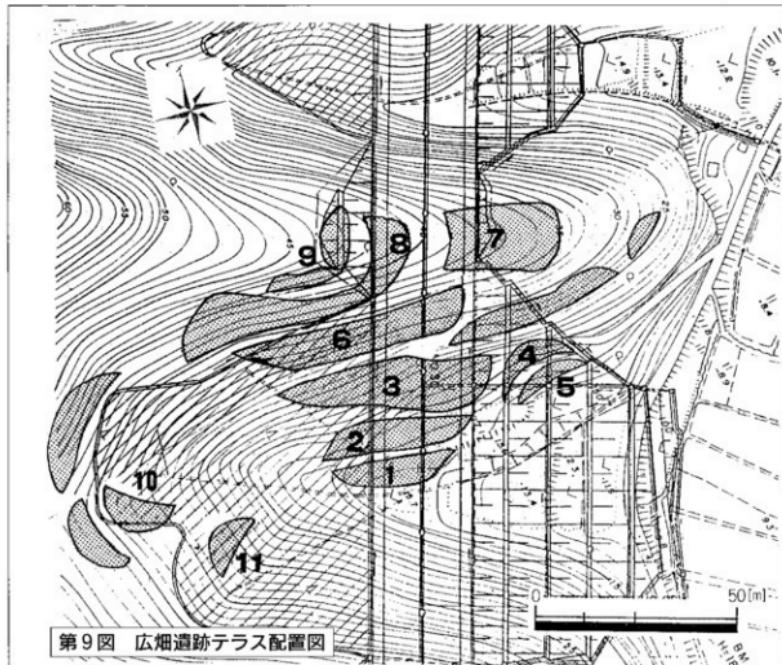
弥生～古墳期の集落は標高35～50mの尾根部に形成され、夜坂谷、隠れが谷、広畠遺跡に竪穴住居や段状造構が築かれる。土器のはかに、磨製石鍛、大型石包丁などがある。1～5棟程度と集落規模が小さく、依然として石器への依存度が高いのが特徴的である。

古墳後期～平安期は全域を舞台にして遺跡が形成され、丘陵尾根や斜面部を加工して掘立柱建物跡、鍛冶炉等が築かれる。遺物には土馬、鉄滓、移動式壺、円面鏡、朱塗り土器等が多く含まれる。夜坂谷遺跡、ハタケ谷遺跡では焼土跡と炭溜り、隠れが谷遺跡では土馬祭祀と建物群、広畠遺跡では鍛冶炉と建物群、宮の谷遺跡では建物群と、各遺跡毎に遺構・遺物の構成に差異が見られる。規模と内容において、広畠遺跡と隠れが谷遺跡が中心的位置を占める。



広畠遺跡

通称広畠所在の遺跡で、平成4年度に谷底部分と尾根の南側斜面の下半分を調査し、平成6年度は南側斜面の上半分と頂部、谷奥側の部分を調査した。残りの谷奥部分と隠れが谷側の斜面は平成7年に継続して調査をおこなう。今までに遺跡全体に幅約10~15mの大小10以上のテラスを確認し、長さが小さいものは12mから大きなものは70m近くあった。各々のテラスが斜面または尾根の頂部をL字に削って平坦な床面を設け、そこに掘立柱建物群または堅穴住居を建てている。全体的に遺構の形成が複数の時期にわたっており、小規模なテラスの中には時期の限られるものもある。遺物の出土は第3、6、8テラスが多く、テラスの長さ55~65mと大規模で、遺構の検出状況からもこの遺跡の中心のテラスであると思われる。おもに工房や住居といった施設が考えられ、また祭祀的や統括的な面での利用もしているようである。時期は6世紀末~9世紀にわたり、鉄・鉄器生産に関係する遺跡と考えられる。現在は整理の段階で、具体的なことについては考察中である。





調査地より谷の入り口を望む

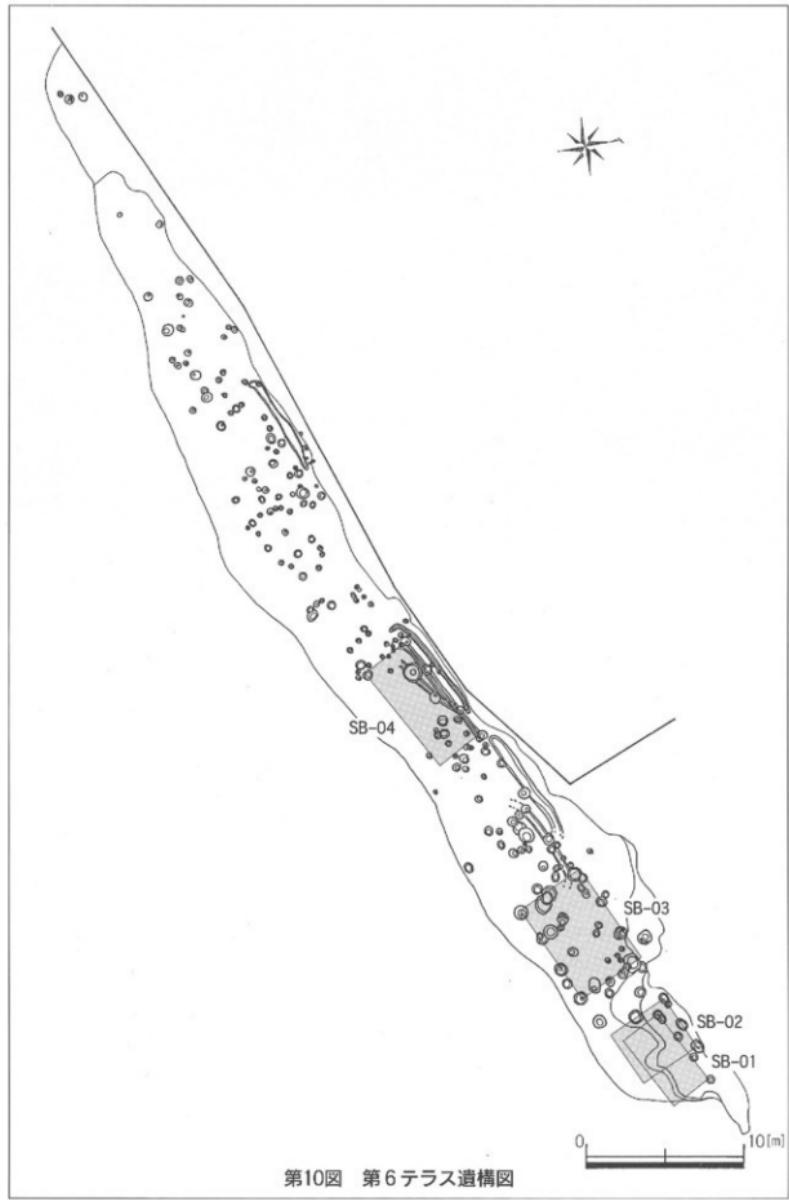
第3テラス

第3テラスは、長さ約55m、現存最大幅約12mの大規模なテラスで、掘立柱建物群が建てられていた。床面では鍛冶炉を検出し、楕円形滓の出土も多い。縁際で数次にわたる厚さ約1mの土器溜りがあり、かなり多時期にわたって活用されている。また主にコシキや移動式カマドなどといった炊飯道具が多いことや、壁が長さ2~3mぐらいにわたって熱を受け硬く変質していることから、ここは台所的な場所として利用していたと考えられる。

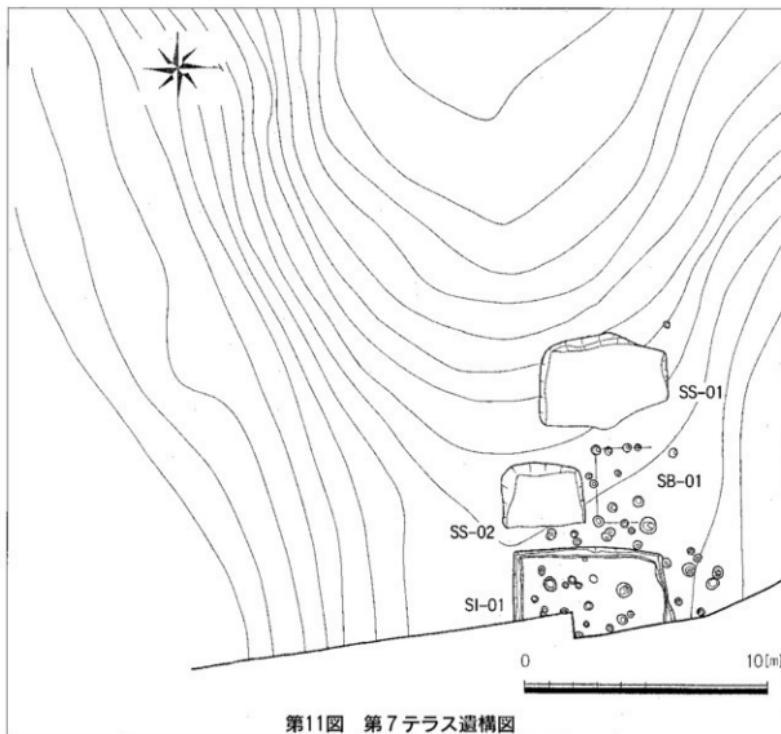
第6テラス

第6テラスは、ほぼ東西方向にのび、長さ約60m以上、最大幅10mの大規模なテラスで、掘立柱建物群が形成されていたと思われる。ほぼ2群にわかれ、何度か建て替えもみられ、また用途別にも作られていたようである。柱穴の規模の大、小の掘立柱建物の2種類を確認し、鍛冶炉や焼上面を床面に検出していることから、工房としての利用があったと思われる。それぞれが壁側に溝を持ち、壁の軸に沿うように建てられている。

S B - 0 3 は第6テラスの東側に位置し、断面し字に削り込んだテラスのはば平らな床面に建てられる。桁行3間、梁行2間で、柱間は2~2.3mではば等間隔である。時期は奈良~平安時代のものである。



第10図 第6テラス遺構図

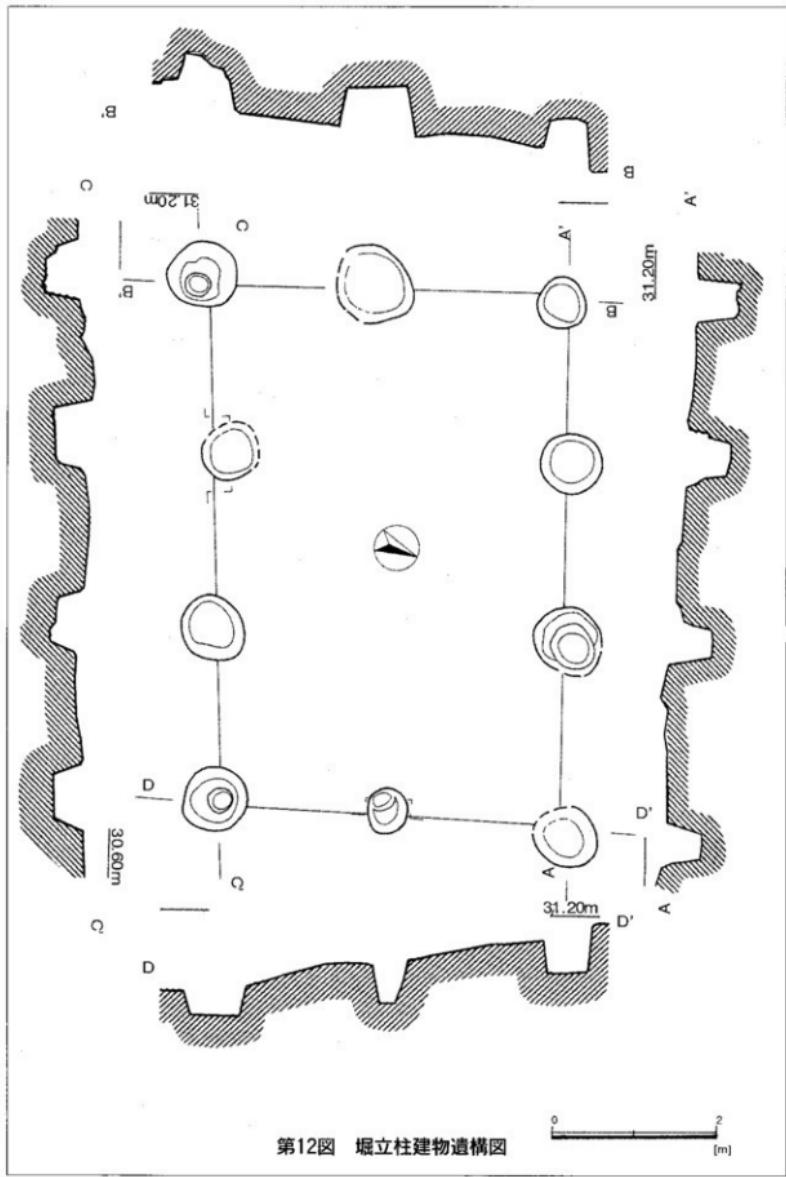


第11図 第7テラス遺構図

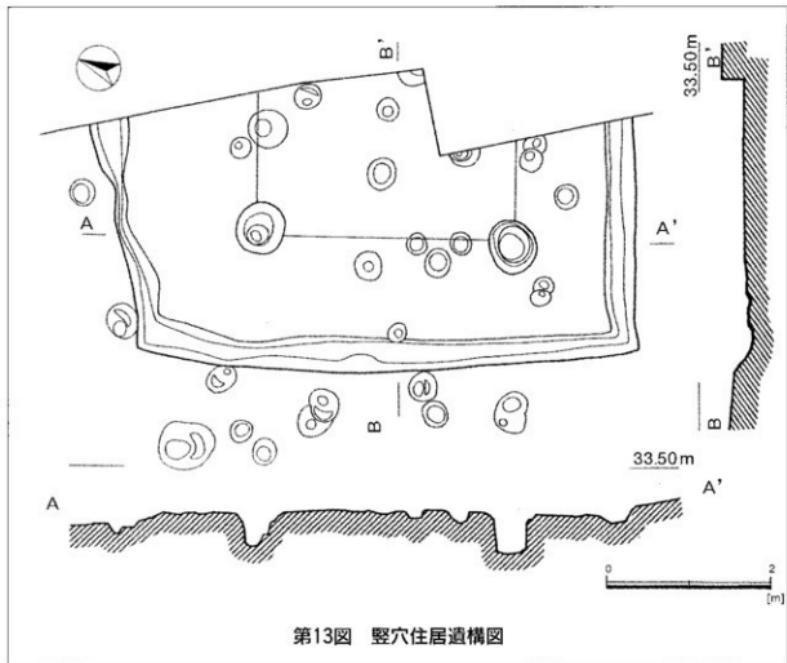
第7テラス

第7テラスでは、竪穴住居跡1基とそれに伴う掘立柱建物跡1基、段状遺構2基を確認している。ほかにも柱穴を検出しているが、建物としては現在考察中である。

S I - 0 1 は尾根の頂部に位置する第7テラスの東端に確認した。遺構の半分が調査区域外であるので不明な点もあるが、平面形は一辺 6.3m の長方形で、周囲に幅35~45cmの明確に角張った溝が巡り、柱穴4穴の竪穴住居と思われる。この建物以外の柱穴をいくつか検出しているが、これについては考察中である。時期は周辺遺跡の類例などから古墳時代前期である可能性があるが、古墳時代前期の遺物の出土は見られず、むしろ古墳時代末~奈良時代ごろの遺物が出土していることから、時期については更に熟考が必要である。



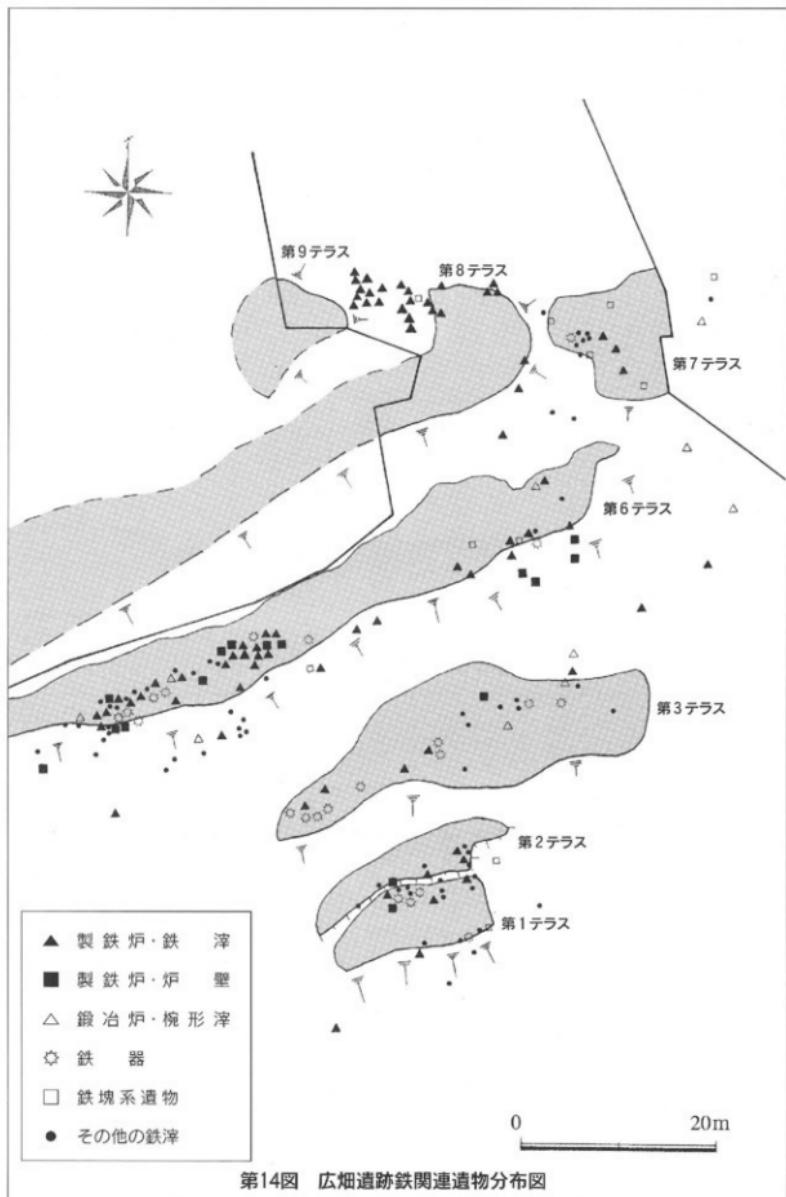
第12図 堀立柱建物遺構図



第13図 壁穴住居遺構図

陰田広畑遺跡と鉄関連遺物の分布について

陰田広畑遺跡では鍛冶炉や焼土面などを検出し、それに伴う工房や住居に利用されていたと思われる孤立柱建物群を確認している。製鉄に関係した遺構はまだ確認していないが、遺物では製鉄炉に伴う鉄滓や炉壁などが出土し、鍛冶炉に関係する鉄滓との出土状況が大変興味深い。これらのことから今回は特に、鉄関係の遺物についての分布を図示してみた（第14図）。この図からすると、各種類の鉄滓の分布がテラスごとで、またテラスの各部分で偏っており、鍛冶炉関係の鉄滓（楕円形滓など）が多いところ、製鉄炉関係の鉄滓（製練滓など）や炉壁片の多いところ、両者の混在するところがあり、このことからテラスが作業工程ごとに使い分けられていた可能性がある。



第14図 広畠遺跡鉄関連遺物分布図

広畠遺跡の遺物

古式土師器（甕）、土師器類（甕、高杯、皿、コシキ、土製支脚、移動式カマド、ミニチュア土器、フイゴ羽口）、須恵器（蓋・坏・皿、甕、壺、鉢、円面鏡）、鉄滓・鉄製品、耳環、勾玉など。量が多く、調査した奥除田遺跡群中の約9割強を占める。

時期的に古墳時代前期から平安時代までがあるが、特に古墳後期から奈良時代を中心としている。鉄滓、フイゴ羽口などの鉄関係遺物や、移動式カマド、耳環、勾玉、円面鏡、朱塗土器などが特徴的である。玉縁状の特異な口縁の土師器16-6などもある。

古式土師器は、第8テラス及び周辺斜面で数点を数えるのみである。16-1・2は複合口縁の甕口縁。1は櫛描き平行線を持つ。2は剥落が著しい。青木4~5・6期に該当する。

古墳後期以降は、須恵器の形態より大まかに3時期に分類できる。

I期の須恵器はいわゆる古墳時代の須恵器形態で、坏蓋は丸みのある天井を持ち、坏身は立上りがやや退化する（15-1~5）。6世紀末から7世紀前半期と思われる。

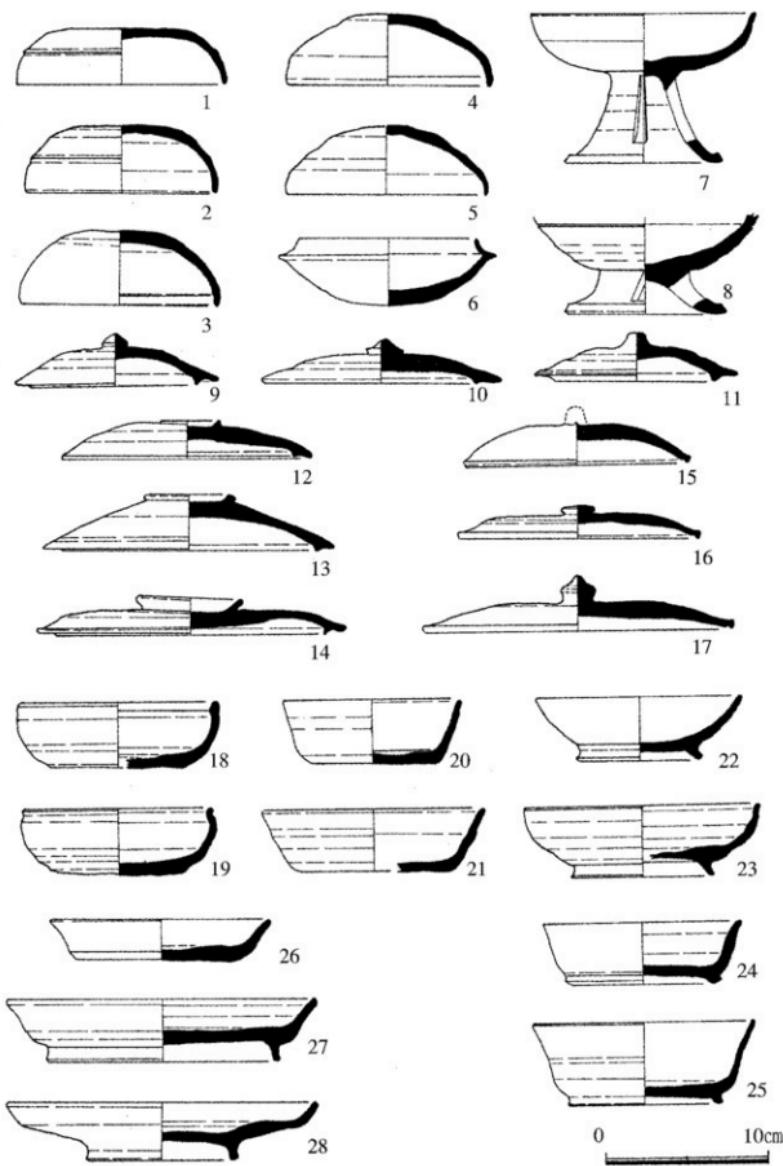
II期の須恵器は返りを持つ蓋と、底部ヘラオコシの坏・皿である。蓋は、つまみに宝珠、乳頭状、環状があり、平たい天井頂部が屈曲して伸びるA類（9・11）、丸みを帯びたB類（13）、ほぼ水平に伸びるC類（14など）などの形態がある。坏は高台の無いA類と高台を持つB類（22）がある。15-9~14、22が該当する。7世紀後葉期を中心とするものである。

III期の須恵器は蓋の返りが消失し、坏・皿は回転糸切りの底部を持つ。蓋は形態的にB、C類で宝珠・擬宝珠つまみ、坏は内湾して立上り口縁端部が屈曲するAa類（15-18,19）、直線的に外傾して開くAb類（20,21）、高台を持ち内湾して立上るBa類（23）、高台を持ち直線的ないしはやや外反気味に立上るBb類（24,25）などがある。III期は8世紀後半から9世紀代にわたる。

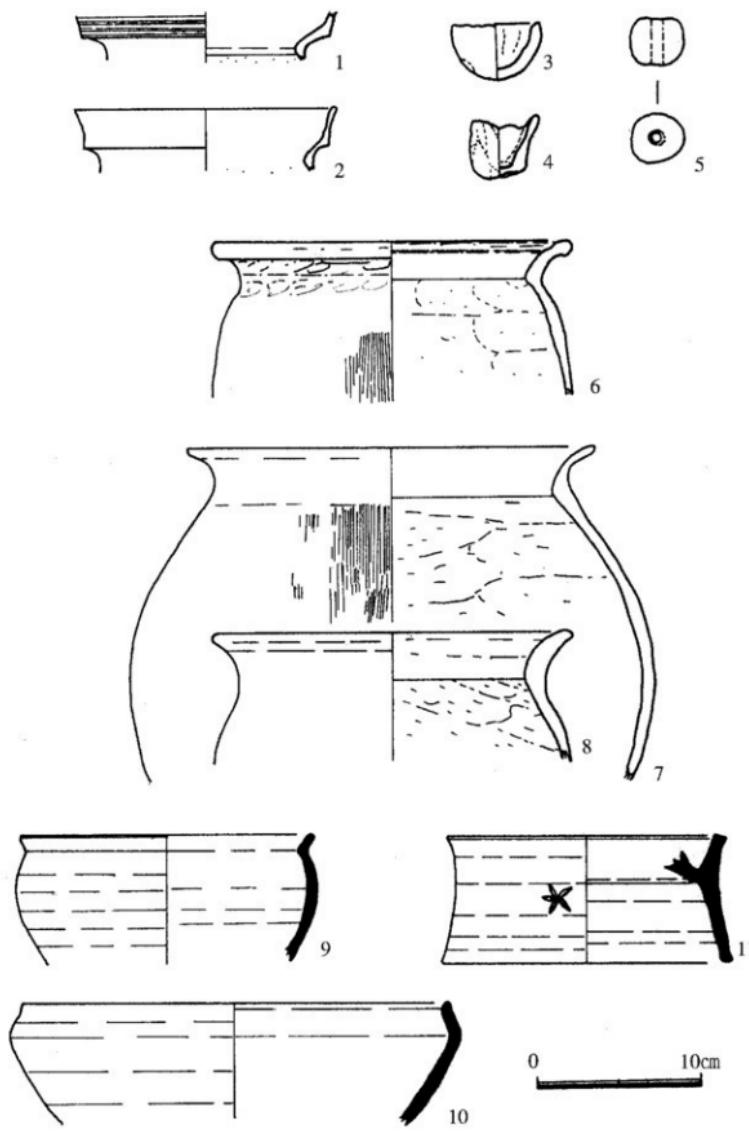
表1 広畠遺跡テラス別遺物出土状況

	第1テラス	第2テラス	第3テラス	第4テラス	第5テラス	第6テラス	第7テラス	第8テラス	第9テラス
I期 (古墳時代後期)	○	○	○	○	△	△	△		
II期 (飛鳥時代)	○	○	△ (上部転落?)	△ (上部転落?)	○		○		
III期 (奈良・平安時代)	△	○	○			○	○	○	
備考	ピット 削平	掘立・総柱 建物重複 鍛冶炉	小テラス	小テラス	建物重複	掘立・堅穴 (古式土師器有)			

(△ 少量 ○ 有り ◎ 多量)



第15図 隕田広畠遺跡出土遺物①



第16図 隠田広畑遺跡出土遺物②

まとめ

広畠遺跡は6世紀末から9世紀代の鍛冶・鉄器生産を主体とする集落・工房跡と考えられ、遺構の規模や遺物内容から、奥陰田遺跡群の中での中心的位置を占めるものと思われる。また墨書き器、朱塗土器や円面鏡などの存在から公的な影響を受けた遺跡であると考えられる。

遺跡は尾根全域でまとまりを持つものであり、立地や機能による使い分けや時期による変遷が見られる。斜面部には主に掘立柱建物群、尾根部には堅穴住居、段状遺構が築かれ、また、鉄滓の種類別分布にはテラスごとの偏りが認められる。第2テラスでは工房跡と思われる焼土面を伴う小規模な建物を、直径1m前後の柱穴を持つ大規模な総柱建物が切り込んでいた。第3、第6テラスでは、場所により掘立柱建物群の規模の大小や炉跡の有無などの違いがあり、頻繁な建替えや重複の痕跡も認められた。

遺跡の形成をみると、当初は尾根裾部の第2、第3テラスを中心に小規模に営まれ、次第に尾根上部の第6、第8テラスを中心に谷奥にも展開し、拡大充実する傾向を見せている。建物の規模も大型化の傾向を示す。

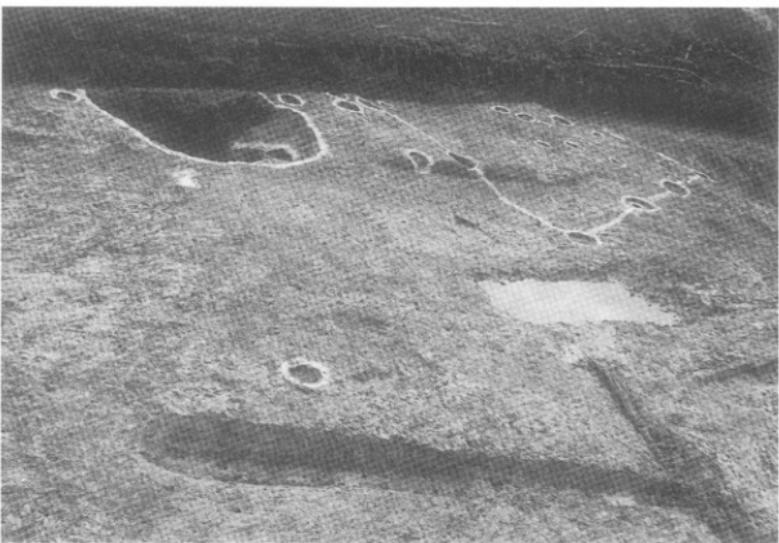
同様の遺跡は、近年、陰田地内や安来市等近隣地域での発見調査が増えているものである。今後、鉄・鉄器の生産と流通を踏まえながら、陰田地域単独ではなく、広域的な観点からの検討を進めて行く必要があると考える。



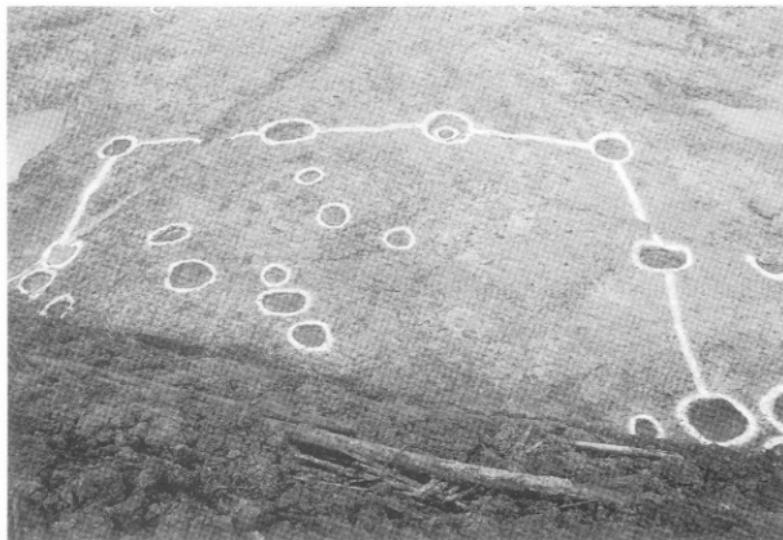
調査参加者



調査地全景（南西より）



井戸と掘立柱建物（北西より）



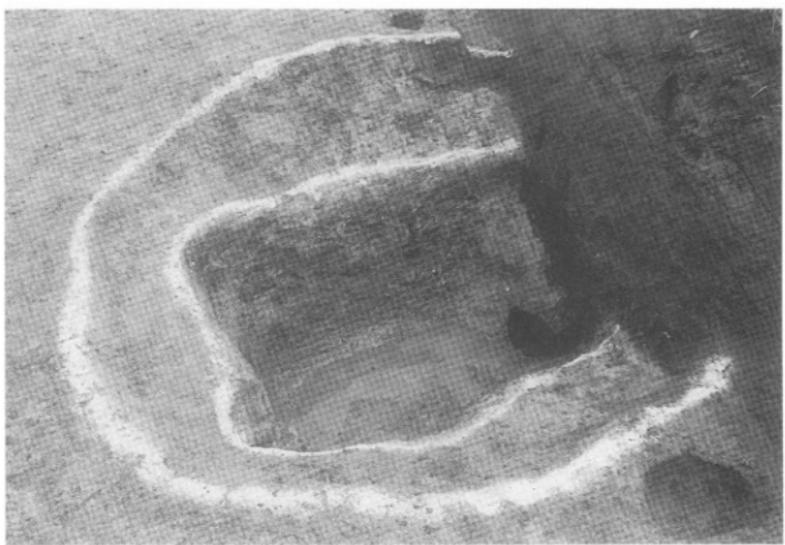
掘立柱建物（南東より）



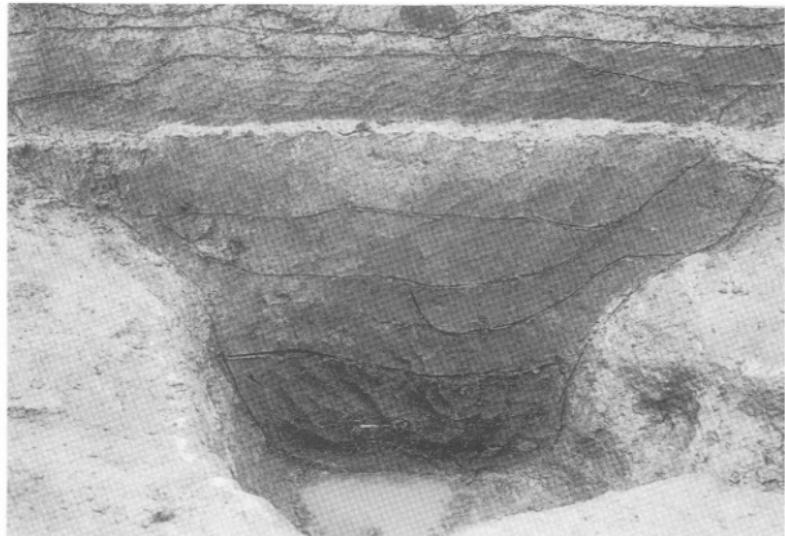
掘立柱建物（北西より）



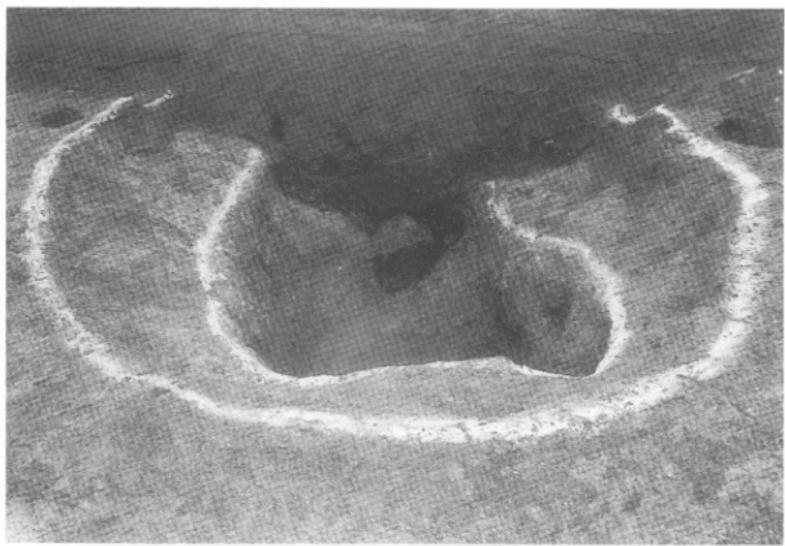
井戸（南東より）



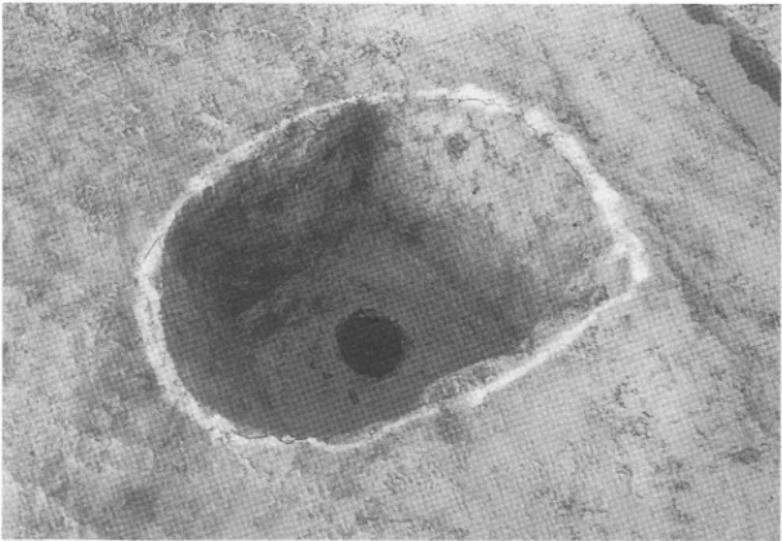
井戸（西より）



井戸土層断面（北西より）



井戸（北西より）



落し穴（南より）



落し穴（南東より）



調査地北部分（南から）



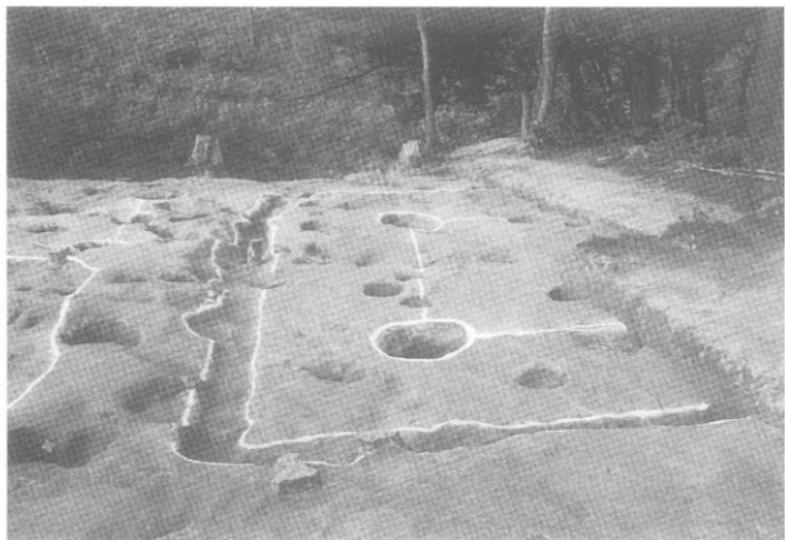
第6テラス全景（東から）



掘立柱建物（北西から）



掘立柱建物（北から）



堅穴住居（南から）



堅穴住居（南西から）



第3 テラス遺物出土状況



カメと土製支脚

210.2
Yon
(14)
図書館

図版
10

陰田広畑遺跡



遺物出土状況、土製支脚



コシキ



移動式カマド